参画だより

№31
2007.3.23
弘前市民参画センター

「夫婦・家族でコミュニケーションを」 ― 岩木地区で講演会開催

2月24日、中央公民館岩木館で「ひとにやさしい社会推進講演会」が開かれました。11月に行われた相馬地区での講演会に続き、ATVアナウンサーの川口浩一さんが「気づきからの始まり～視点を変えると自分がかわる」と題して講演を行いました。

川口さんはまず、自分の結婚当初を振り返り、子どもや妻が病気のときに、周囲の助け合いの必要を痛切に感じたという経験から、「助け合いには男も女もない。家庭においても夫婦が家事を分担すればお互いに楽になり、そのことに気がつくと家庭生活の見方も変わる」と話しました。

また、生命保険会社が一般募集した川柳の中から、夫婦や家族関係について詠まれたものを紹介し、これからの時代の男性・女性の生き方について聴衆にアドバイスをしました。

「家族でもっと話し合いましょう」と話す川口さん

「長年生活をともにしていくうち、会話がなくなっていく夫婦もあるかもしれない。ときにはテレビを消して会話をするようにしたり、同じ趣味や価値観に近づく努力がいる。『夫の最大のストレスは妻に先立たれること。妻の最大のストレスは夫に長生きされること』だという人もいる。これから定年で退職し、家にいることの多くなる男性は、毎日が日曜日だと思ってはいけないし、妻もそう思わせてはいけない。夫は家事についてそれなりの勉強や努力が必要で、妻は『夫育て』が必要。お互い話し合って家事を分担することにより、長い余生を手に手を取り合って生きていけるようになる。

お互いを気づかい合い、これからどう生きていくか、男と女はどうあるべきかを考えることで家庭が変わり、家族が変わり、学校、地域、社会が変わっていく。その考え方を心のどこかに持ちながら暮らしてほしい」

川口さんの言葉に、訪れた約70人の聴衆はうなずきながら熱心に聞き入っていました。

基調講演に続き、「弘前友の会」の柴祐子さんと「ななの会」の三浦幸子さんが、それぞれ行っている活動の内容を発表しました。

柴さんは料理の保温に便利な「鍋帽子」も紹介

柴さんは、家庭生活について、生活をシンプルにして家族の誰でも家事に参加しやすくする、家族で話し合って物の置き場所を決める、などの簡単な工夫で「風通しのよい家」にすることができる、と提案しました。

次に、平成17年度に弘前市が主催した男女共同参画推進活動講座で学んだ三浦さんが、川柳を交えたオリジナルの寸劇「身の回りからの気づき」を仲間とともに披露しました。寸劇は日常の夫婦の会話にみられる固定的な性別役割分担意識を描き出したもので、内容もさることながら、出演者のユーモアたっぷりの演技に、会場は終始笑いに包まれ、盛んな拍手が送られました。

最後に川口さんはまとめとして、「男女共同参画は現在過渡期にある。今日の講演会のような場をきっかけに、一人ひとりが今後どのように家族として向き合い、どういう生き方を模索していくかについて話し合ってほしい」と、訪れた人たちに呼びかけました。

ふたりのかけ合いに会場は大爆笑

「子は宝　二人で子育て楽しみたい」
「長生きの秘訣はひとつ　助け愛」
などの川柳を劇中で披露

弘前市周辺で活躍している「女（ひと）・団体（グループ）」を紹介　No. 8

「人との出会い」が活動の支え

十面沢町会公民館館長　澤田　秀子さん

［公民館活動］
毎年恒例のお地蔵様の衣づくり

◆農家の嫁が始めた活動

弘前市北端の山間部に位置する裾野地区。そこのりんご農家の跡取りの元に、34年前に嫁いできました。

当時の農家の嫁は、舅（しゅうと）・姑（しゅうとめ）に自分の意見は言えない。本を読むことなどは嫌われる。子どもの授業参観にも行かせてもらえない。ただ、草むしりや農業、家事をしていればいいと言われていました。私自身、このような状況で、笑いのない家庭で子どもを2人育てていました。

「農家の嫁」の立場に、我慢、不満、不安を感じて過ごす毎日。「こんな思いは私だけなのか。他のお嫁さんはどう思っているのだろう。」この思いをきっかけに、昭和58年、十面沢町会の婦人教室長をすることになり、28名の農家のお嫁さんが学級生として集まり、話し合いや勉強会などを始めることになりました。

◆嫁たちの意識の変化

20～30代の若いお嫁さんたちは、それぞれ子育てや農家の嫁の立場など悩みがいっぱいあり、孤独でした。母親教室を開催して交流を図るうちに、それぞれの意見や情報を交換するために新聞を出そうということになり、今度は会報誌の編集長をすることになりました。

学級生それぞれが何らかの役目を持ち、みんなが書く作業をしました。集まるたびに友達ができ、自分の思いを文章にすることで、もやもやしていたものがはっきりしてきました。そして、みんなが「このままではいけない」と考え始め、さまざまな活動をするようになっていきました。

◆嫁たちの活動への偏見

公民館活動に夢中だった私たちは注目の的でした。現在のように「男女共同参画社会」という言葉もない時代でしたから、「お宅の嫁もそれ（婦人教室）に入っているのか」「新聞に自分の家の恥や、舅・姑の悪口を書いているのか」と嫌みやからかいもたくさんありました。

子ども・地域のために公民館まつりや盆踊りの準備、料理、しつけ、薬物依存の勉強会なども行いました。市で開催されたスポーツレクや社会的な活動で賞をもらったりもしました。それでも、周りからは、「農業や家事の手を抜く怠け者」と言われていました。

◆発想の転換

弘前市主催の弘前きらめき女性塾※で男女共同参画を学び始めたころは、「男女平等？　何を言っているの。そんなことできるわけない」と思いました。グループワークでも、自分の立場を理解してほしくて苦労話ばかりしていました。しかしある時アドバイザーの方に、「多くの女性ががんばっている。これからは学んで、その先に自分の成果・実績を残さないといけない」と言われて、目が覚める思いがしました。男女共同参画の意識を持ち「いい嫁、いい妻はやめよう。自分らしく行こう」と思えたら、いろいろなことが気楽に思えるようになりました。

◆周りの変化

家族の協力もあり、20年余り公民館活動を続け、公民館婦人指導員、地区保健衛生委員長などをしてきました。缶拾いやひとり暮らしのお年寄り宅訪問などの活動も10数年になります。「嫁の分際で」と言っていた人たちが「ありがたいね」「お世話になっているね」と認めてくれるようになりました。

◆これからの夢

夫とふたりでグリーンツーリズムをすることと、農家の女性たちを中心とした産地直送販売で女性の収入を増やし、「みんなの生きがい」になるような活動をすることが夢です。そのための学びを始めます。今までの多くの学びがすべてつながっています。今後それらを生かす活動をしていきたいと思います。

※平成11年～15年の5年間弘前市が実施した事業で、男女共同参画社会実現のため、これまで社会参加の機会が少なかった女性を対象に、社会のあらゆる分野への参画をめざして学習の機会を提供した。

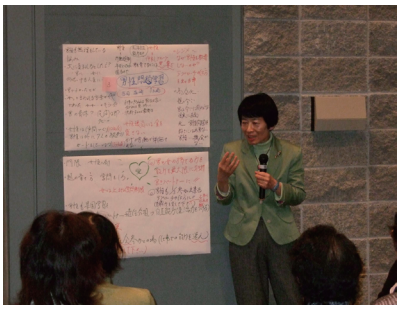
略歴

昭和58年　十面沢町会婦人教室室長
59年　婦人教室会報誌編集長（5年間）
・会報誌「きふね」発行開始
※「きふね」は町会神宮の名称から
平成元年　裾野地区公民館婦人指導員（2年間）
4年　弘前市「ほのぼの交流事業」（継続中）
・一人暮らし老人宅訪問活動
5年　会報誌「きふね」100号・記念旅行
11年　裾野地区保健衛生委員長（6年間）
・ゴミ分別モデル地区広報活動
・「保健だより」を発行（2年間）
12年　弘前市廃棄物減量等推進審議会委員（5年間）
13年　十面沢町会監事（4年間）
17年　十面沢町会公民館館長（継続中）
18年　県男女共同参画推進員（継続中）

男女共同参画社会の実現をめざし

青森県男女共同参画センターオープンカレッジ in 弘前
「市民の力を生かして協働へ」～学習と実践と協働の課題～

市民と行政の力をあわせて



平成18年12月9日、弘前駅前市民ホールにおいて、青森県男女共同参画センターオープンカレッジin弘前が開催されました。男女共同参画社会の実現へ向け、行政がこれから市民の力をどう生かし、協働していくかをテーマに、基調講演、協働の事例発表、参加者によるグループディスカッションが行われました。

◇　◇　◇

基調講演では、講師の下村美恵子さんが、市町村での男女共同参画の取り組みについて課題と展望を述べました。

男女共同参画推進の課題

「男女共同参画推進施策は、未だ多くの市民や自治体職員に十分認識されているとはいえないと思います。国・自治体が政策や施策に力点を置いてこなかったことも事実です。先進的に取り組んできた自治体もありますが、『自治体の特別サービス』とみなされてきた部分がないとはいえません。

『男女共同参画はいいことだ』という合意があっても、実際それをどのように進めていけばいいかということはわかりにくく、住民の自由意志だけでは達成が困難です。これからは、男女共同参画の理念を形にする取り組みを、自治体が行政課題として進めていくことが必要だと思います。

変化の進まない現状を打破するためには、行政と住民が連動した男女共同参画会議の設置が有効だと考えられます。ここで市民や企業、行政がともに協働の試みや仕組みを検討することが、施策実現の力となります。

講師略歴

下村美恵子（しもむらみえこ）さん

H３～14年　東京都足立区教育委員会足立区女性総合センター社会教育指導専門員。男女共同参画推進講座の企画・運営及び男女共同参画計画策定などを担当。

H14年４月～　フリーランス編集＆男女共同参画推進学習プランナー

H16年～　さいたま市男女共同参画推進センター事業コーディネーター（現職）

『協働』と行政の役割

協働は、異なる主体同士が手を結び、それぞれが持ち寄る資源を出し合って活動することによって、より有効で良い成果が見込まれることで成り立ちます。一方が一方を体（てい）よく使うなど、少しでも不平等感があればそれは協働とはいえません。お互いに資源を出し合い、納得したうえで進めていく必要があります。

市民のほうが力をつけている一方で、行政職員に対する研修や啓発はまだ十分ではありません。これから行政と市民がきちんとした形で協働を行っていくためには、市民に対する普及啓発だけではなく、庁内に対する啓発や意識の改革も進めていくことが、自治体に課せられている役割です」

◇　◇　◇

基調講演に続いて、東京都足立区のＮＰＯ法人ウィメンズ・サポート・オフィス「連」の坂本照子代表理事と生田ゆみ代表副理事が、「協働の一事例～私たちの場合～」と題して事例発表を行い、区主催の女性問題学習を経てＮＰＯ法人を設立した経緯や協働の難しさなどを語りました。

休憩を挟んでグループディスカッションの時間が設けられました。参加者は基調講演と事例発表を踏まえて設定された「女性労働」「ＮＰＯとボランティア」「行政との協働」などのテーマから、各自関心のあるものを選んでグループに分かれ、それぞれの課題や今後の可能性などについて話し合いました。

活気に満ちたグループディスカッション

（弘前市民参画センター利用団体紹介）

《(財)日本郵趣協会弘前支部》
世界の切手事情を学んでみませんか

雛祭りを祝う可愛い女の子。こんな切手を貼った手紙が届きました。古い時代の雛人形飾りを家族で鑑賞しませんか、の便り。郵趣会の友人からの春の知らせです。

郵趣会を紹介しましょう。

切手収集を趣味とする人達の会で、日本切手・外国切手・文献など多彩です。世界の郵便切手の収集につき、その知識と方法を普及しています。東京・目白に本部が有り、大きな切手の博物館を持ち郵趣活動をしています。全国６本部・104 の支部に大勢の会員がいます。本部では切手を楽しむ雑誌「郵趣」の月刊誌を発行しています。

弘前郵趣会は 1982 年（S57 年）５月に発足、本部に加入しました。翌月から毎月会報を発行、この３月で 297 号、今年５月で 25 年になります。楽しい会をモットーに 32 名の会員が月例会で切手の交換、勉強の発表、情報交換、切手収集用品購入と集います。

年１回の大イベント、「趣味の切手展」も 24 回を数えました。16 名位の会員が各自、テーマを決め、切手・文献等で作品を作り弘前文化センターで発表しています。世界で発行されているモナリザの切手を集めた作品など多彩で、毎回大勢の見学者でにぎわう「切手展」は楽しみの一つです。

皆さんもお手持ちの切手が一杯あると思います。切手のテーマを決めて遊んでみませんか。いろいろな職業の人、仕事を終えた人、女性会員もおられます。先輩会員が指導してくれますので安心です。作品を発表してみましょう。世界の切手事情が分かり勉強になります。毎月第２日曜日、１時～３時まで市民参画センター３Ｆ活動室１で例会を開いています。一度のぞいてみませんか。お待ちしております。

(財)日本郵趣協会　正会員　C3245
弘前支部　企画担当　成田重三

「切手展」の会場
（弘前文化センター）

本の紹介

タイトル

『いまどきの「常識」』

昨日の常識は今日の非常識？

著者　香山リカ
発行　岩波書店

久しぶりに書店に出かけて見つけた１冊。タイトルを見て、いまどきの「常識」にうとい私が、「いまどきの『常識』ってどうなの？」という気持ちから読み始めてみたが、これがなかなか興味深い内容である。

目次を見ると、よくテレビや雑誌で見聞きするフレーズが並んでいるが、読む人がどう感じようと、いずれも実際にはすでに「常識」として社会のルールになりつつあるものばかりだと筆者は言う。

人間関係・コミュニケーション篇、仕事・経済篇、男女・家族篇、社会篇、メディア篇、国家・政治篇の６つに分かれて書かれているが、個人的には「男女平等が国を滅ぼす」（男女・家族篇）と「テレビで言っていたから正しい」（メディア篇）に、より興味を抱いた。

昨日の常識は今日の非常識とも言われる現代社会の中で、自分の考えとは別に流されてしまうこともある。この本のよいところは、著者が「このことについてはこうだ」と言い切っているのではなく、読む人に何かを投げかけ、考える余地を残しておいているように感じられるところだ。精神科医の著者だからこその、内容になっているのだろうと思う。

by　komori

編集後記

例年であれば一面銀世界のはずなのに、何か不気味な思いで「積雪ゼロ」の通りを走る。いったい地球はどうなってしまったの？　いまから夏の水不足もささやかれているが、大丈夫なのだろうか。

去年の今頃は、雪、雪、雪で大変だったなぁと思いながら、自然の力の大きさを思い知らされるこのごろである。

森

弘前市民参画センター

〒 036-8355　弘前市大字元寺町 1-13
TEL　0172-31-2500
FAX　0172-36-1822
開館時間　9:00 ～ 22:00
休館日　12 月 28 日～１月３日